



## コミュニケーション： 技術は発達しても・・・

おおくぼ  
大久保

あきこ  
暁子

連合ヨーロッパ事務所・所長

3度目の海外駐在も終わりが見えてきた頃、この原稿の依頼をいただいた。さて何を書こう、と『労働調査』のバックナンバーをひっくり返してみたが、みなさん結構固い、仕事絡みのテーマで書いていらっしやる。しかし時は夏、スケジュールは見事に空白である。そこでこれまでの海外滞在と絡め、通信手段とコミュニケーションの変遷を振り返ってみることにしたい。

1990年代のはじめと終わり、そして2000年代の中盤と合計3回、図らずもアフリカ、東南アジアそしてヨーロッパに居住する機会を得た。この20年弱を振り返って何が一番変わったかといえは、通信技術の発達に尽きると感じる。日本国内にいても同じだったかもしれないが、時間と環境の変化があいまって、居所を変えるたびに大きなインパクトを味わってきた。

最初の海外滞在は1991～93年のチュニジア。北アフリカ、地中海沿岸の小国である。このときは青年海外協力隊員としての滞在中で、しかも首都から離れた地方都市にいたため、情報面での隔絶感は相当なものがあった。TVはもちろんのこと短波のラジオ日本すら入らず、数ヶ月に一度首都のJICA事務所に出向いて航空便で届く新聞を一気読みするのが日本の事情に触れる唯一の機会であった。筆者の住居に電話（もちろんアナログ回

線）を引くのに半年もかかったこの時代、インターネットはようやくその影がちらりと見え始めた頃で、一応システム・エンジニア隊員であった筆者ですら、ウェブブラウザ「ネットスケープ」の前身である「モザイク」についての記事を雑誌で読んで『何のことだか?!』と頭をひねっていたものである。

帰国後次に海外に出る1997年までの期間は、職場でPCがワープロ専用機に取って代わり、一人一台まで普及していく時期であったように思う。インターネットはまだまだ浸透しておらず、ファックスが大活躍であった。なお年齢がバレルのを覚悟で書いてしまえば、筆者がファックスを職場で初めて見たのは新卒で就職してから数年後のことである。当時は文書を、日数のかかる郵便に頼らず、瞬時に遠隔地に届けることのできるファックスは画期的な装置であった。

PCのユーザ・インターフェースもまだまだで、『パソコンの操作で時間が取られて仕事が進まない』『パソコンが入ってから集中して考える仕事ができなくなった』等の声が、主に年長の方々から聞こえた。思い返せばまだPCは「道具」と言えるほど使いこなせるものではなかったのだろう。PC自体も、使う側の人も。

筆者が初めてインターネットに自力で接続した



のは、2度目の海外滞在で1997年にシンガポールに赴任した時である。自分のPCが電話回線のネットワークを通じて他のPCと繋がるという実感、そしてそれを自分の手で手配するという経験は、なかなか刺激的であったことを覚えている。プロバイダは確か2～3社（当時のシンガポールの人口は3百万人だったので人口比では適正規模？）で、料金は日本のそれと大して変わりがなかったと記憶している。もちろんアナログ回線のダイヤルアップ接続、24kbpsの通信速度で従量制課金、使用時間に怯えながらの接続であった。

仕事でもようやくインターネットが浸透し始め、メールアドレスが事業所全体で一つとか、各局ごとの代表アドレスが設定されるようになった。シンガポールの勤務先、国際自由労連（現・国際労働組合総連合）アジア太平洋地域事務所で前任者が開設したウェブサイトの管理も筆者の担当であったが、当時のサイト管理はいかに情報の充実と『軽さ』のバランスを取るかが課題であった。htmlタグをエディタで手打ちしていた牧歌的な時代である。

2年後帰国すると、連合本部もようやくPCもメールアドレスも一人に一つの体制が実現していた。とは言ってもスタッフ間のスキルには相当の差があって、筆者の前任のヨーロッパ事務所に

国際電話（！）で、メーラに新規アカウントを設定するやり方を指南したことが思い起こされる。そこに来たのがWeb 2.0の波。通信スピードが飛躍的に増大し、かつての制約はどこへやら。常時接続が当たり前になってユーザ側のスキルが問われる部分が極小化。通信が生活の不可欠の一部となり、インターネット依存を生み出す。2005年に赴任したベルギーではADSL接続が一般的で、料金は日本に比べて高いと感ぜられるものの（ユーロ高も多分に影響あり）、接続環境は遜色ない。

普段意識することはまれだが、現在私たちは未曾有のスピードで技術が発達する時代に生きているのだと言われる。たしかにこの20年弱を振り返ってみれば、通信手段の激変振りには唖然とするものがある。しかし思うのだ。手段はあくまでも手段でしかなく、コミュニケーションの根幹はやはり『なに』を『どう』伝えるかにある。めちゃくちゃな日本語のファックスを送ってきた人から届くのは、やはり意味不明のEメールである。

これからも通信技術は進化し続けて、自分自身がついていくのに苦労する時が来るかもしれない。そうなるでもコミュニケーションの基本を忘れず、表現する力を磨く努力を続けていこうと思う。